

歴史研究の想像力

— 資料のWEB公開に際して —



【幼児の教育】
(第54巻第1号) 1946年
戦後第1号

加島大輔

この『幼児の教育』誌が、WEB上で公開され始め、私たちはインターネットに接続する環境さえあれば、いつでも目にする事ができるようになって

手に入れることができるか、常には史料を扱っている歴史研究の立場から考えてみたいと思います。

います。今回初めて知って驚いたのですが、本誌はすでに百年以上続く、大変長い歴史をもつ雑誌です。その間のさまざまな出版事情の変化などにもかかわらず、継続して刊行されているという事は、幼児教育の世界にとってはもちろん、歴史的にも意味をもつものと思います。ここでは、歴史的な資料（以下史料と総称します）がWEB上で公開され、

とはいえ、私は歴史研究の世界に足を踏み入れて間もない、いわば駆け出し者です。それでも、近年の歴史的な資料をめぐる状況が、非常な速さで変化していることを実感します。たとえば、史料の撮影方法も、以前は重いマイクログ撮影機を使って、マイクروفイルムに撮影していました。もちろん、現像してみるまで撮影結果はわかりません。うまく撮影

できず、撮り直しをする場合もあったと聞きます。しかし、現在はデジタルカメラが高性能化しており、史料撮影にかかる手間は大幅に減りました。

そして近年、史料自体について、少しずつではありますが、WEB上での公開が進んでいるという状況もあります。挙げてみますと、国立公文書館がアジア歴史資料センターという電子資料センターを運営し、国の政策にかかわる史料をWEB上で公開しています。また、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーは、明治期の図書を中心に著作権保護期間が満了したものを中心に公開しており、徐々に公開範囲は大正期に広がりつつあります。このように私たちが史料を入手する方法は、以前とは大きく変わってきているのが現在の状況といえるでしょう。

『幼児の教育』誌のWEB上での公開は、創刊号からすべて、しかも著作権保護期間の満了を待たずに行われる点、また、記事内容についての検索機能が

備わっているということが特徴だと思われます。これらのことは、歴史研究にとっては次のような意味をもつのではないかと考えます。一つは、WEB上で公開される史料についてはそうなのですが、史料を探索に出かける必要がない、ということ。どのような史料がどこに残されているのかということは、歴史研究者にとっては身に付けておくべき知識の一つであり、自分の関心にかなう史料は文字どおり「足で探す」ことが求められます。したがって、国内はもとより、研究関心によっては海外まで出かけることも珍しくありません。WEB上での公開が、その労力を大幅に軽減してくれるのは間違いないでしょう。

いまさら言うまでもないことですが、史料に残された事実から、ある時代の状況を構造化してみせる歴史研究にとって、史料は最も重要な素材です。この重要であるという意味には、単に史料に書かれて

いなければ、それを事実として扱うことができないということのほか、次のような意味もあるといえます。それは、史料が、自分がそれまで歴史の常識と思っていたことをくつがえすような場合もあるということです。

たとえば、「この時期にはある制度が完成されて機能していたはずなのに、それを別の方向に変えようとしていた。しかし、それが頓挫したために、今は知られていない」といったように、自分の仮説に沿って、それに合う史料だけをつなぎ合わせていたのでは、そうした史料は見落としていたかもしれない。可能な限りすべての史料を見ることで、全く忘れ去られた事実が、自分の常識を超えて現れる場合もあるのだといえます。したがって、『幼児の教育』誌が今回、ある一部分だけではなくほぼすべて公開されることは、史料としての価値を高める点において、大きな意義をもつと思われれます。

また、図書館の蔵書検索など、WEB上での史料公開に限ったことではありませんが、自分の必要なキーワードで検索が行えることは、利用者にとっては大変便利なものといえます。目録上、あるいは目次から一つ一つ探す手間、あるいは見落としという事態を避ける検索機能が、『幼児の教育』誌の公開においても使えることは、ありがたいことです。

さまざまな便宜が供されるWEB上での史料の手ですが、その一方で気をつけねばならないことも考えられます。それは、歴史研究者にとっては自明であり、かつ重要なことなのですが、平面上に検索によって現れた史料が、どのような意味をもっているのかについての想像力をこれまで以上に働かせる必要があるということです。すなわち、たとえば政策にかかわる史料は、いつ、どの部署が書いたものかなどの条件によって、系統的に整理されています。したがって、なぜそこにその史料があるのかに

は一定の必然性があり、私たちはその時期の史料全体から、当時の状況を構造化できるといえます。また雑誌についてはたとえば、書架に並んだものを順番に練っていく中では、その掲載号の前後にもある程度目を通すのが普通かもしれません。一方、検索機能を使用して、ある人物が書いた記事を集めた場合、それらの記事がどのような時代状況の中で書かれたのかなど、吟味が必要だということですが。また、特に雑誌記事の掲載には、編集者の意図が反映されたと考えられますから、検索に現れたものだけで、当時の状況をすべて説明できると考えてはならないわけです。

このように、WEB上で史料を入手できることは、歴史研究を行う者にとっても多くの便宜があり、そのご労苦には敬意を表さずにはいられません。そのうえで、「何の疑いもなく、大学に属している学者が一番史料を集め、それらを読んで」と

考えるのは思い上がりもはなはだしい」と述べられた研究者もおられますが、一般の方々も含めて便利になるとはいえ、研究者としての専門性が減じられるということでは決してなく、むしろ注意を払うべきこともあるだろうことは、ここで述べたとおりです。

史料自体も、また最近では書かれた論文もWEB公開が進んでいることもあり、多くの人の目にさらされるという点では、歴史研究者だけが史料を読み解いているわけではないことを自戒しつつ、しかし、大いに史料として活用したいと考えています。

(東京大学 大学院 教育学研究科博士課程)

参考文献

- 原武史『昭和天皇』岩波新書二〇〇八年
土方苑子「都市教育史試論」藤田英典ほか編『教育学年報六教育史像の再構築』世織書房一九九七年